

教師とスクールソーシャルワーカー (SSW) のための学習会 前回までのまとめ

第1回 第2回「困った子」は「困っている子」？ 2017・9・16/2018・1・20

教師の目から見ると「困った子」も、SSW から見ると自身が「困っている子」であることが多い。「困った」行動をとる裏には、そうせざるを得ない家庭的な背景や発達の特徴があつたりする。教師が「困っている子」という発想をすることで、目の前の行動だけに目を向けていた時より、背景を考慮することができるようになり、気持ちのうえで余裕ができる。

不登校の生徒の担任とSSWの見方には違いがある。例えば、逸脱行為（例えば髪を染める）や不登校に対して、‘甘え’ととらえることが多い教師に対し、SSWはそうせざるをえない子どもの背景を見る。また、教師の専門性は、目標を掲げてそれを目指すよう促すことであるのに対し、SSWの専門性は、子どもの今ある姿に着目し、「ちょうど」のところを探って環境を整えることにある。見方や姿勢に違いがあることは悪いことではなく、意味がある。立場・関わりの違いを利用して、自分の専門性を生かすことが必要。・基盤として、相手職への理解・信頼が必要。

第3回 不登校の子どもにどう向き合うか

2018・7・21

1 教師とSSWとの連携をめぐる二つの事例の報告

中学校での2つの事例が示された。うまく連携ができた事例では、教師が不登校生徒への積極的な関わり方を知ると共に、伴走者がいるという安心感をもてた。SSWの介入がうまくいかなかった事例では、教師が過去にSSWから学んだ支援の仕方を別室登校の場面で生かした。

SSWを活用することで、教師だけではできない緩急つけた幅広い対応、社会資源とのつながりができる。

2 グループでの話し合い

- ・SSWを導入しやすくするには、学校全体（特に管理職）の認知度を高めることが重要。
- ・SSWと話し合うことで今までと認識が変わり、教師とは別の視点で、‘困り感’に対応してくれる存在と知った。
- ・自治体によって子どもの生活環境も、SSWの設置状況も違うことがわかった。
- ・外国籍生徒が増えている地域もあり、福祉の関わり方の課題になってきている。
- ・教師と生徒、生徒と生徒という縦の関係に加え、SSWのような‘ななめの関係’が必要。

第4回 不登校の子どもにどう向き合うか（第2弾）

2019・1・13

1 ソーシャルワーカーの立場から

- ・まず、「子どもは生きていてだけで100点満点」で、それに加点して見ていく。
- ・不登校支援に必要な視点として、①子どもの「ちょうど」の見極めの大切さ ②学校はアウトリーチ支援の最後の砦であること ③人や社会とつながる場所・機会の必要性

2 小中高の教師・SSW・児童館職員・フリースクール・地域など様々な立場の参加者から、具体的なアウトリーチ支援の体験や、学校（教師）が出来ること、第三の場所の必要性などについて、熱い話し合いがなされた。最終的には、子どもの「社会的自立」を目指して、教育・福祉・地域などさまざまな立場の連携の必要性があらためて確認された。